

研究ノート

「働き方」について考える社会科授業

中西 仁*

企業が引き起こすさまざまな事件・事故は偶発的なものではなく、その企業の組織のあり方とそれに過剰適応した個人の「働き方」がもたらしたものである、というのが一般的な見方になりつつある。社会科は児童・生徒の社会認識を育成する教科であり、児童・生徒が現代の社会における社会問題を構造的に理解できる教材を開発することが求められている。企業の不祥事が跡を絶たない昨今の状況を鑑みれば、企業が原因となった事件について、組織的な側面や個人の「働き方」からアプローチする社会科授業が要請される場所であるが、そのような授業設計・教材開発は多くない¹⁾。本稿では、企業がもたらした悲劇の典型として、水俣病を取り上げる。すなわち、児童・生徒に水俣病を引き起こし拡大させたチッソ²⁾の組織および社員の働き方に注目しながら「なぜ水俣病が拡大したのか」について、理解に導く授業設計を提案したい。

キーワード：社会科、社会問題学習、キャリア教育、組織風土、働き方、水俣病

はじめに

水俣病の研究をライフワークとする原田正純(2004)は、水俣病の拡大について次のように回想する。

患者の状態は、目を覆いたくなるようであった。しかし、チッソも行政も「原因不明」を理由になんら有効な対策を立てなかった。実際、不明だったのは原因物質であって、原因が魚貝類であることは、すぐに明らかになっていたのである。…これはたとえば、仕出弁当が原因で食中毒がおこり、重大な危険があるのに、弁当の中の何が原因か分からないからと言って売り続けるようなもの

であった。…このとき原因物質の究明に最も近いところにいたのは、工場内部の技術者や専門家たちであった。にもかかわらず、彼らは動かなかった。後に工場内の動物実験で原因が明らかになったときも、その事実を公表しなかった。(原田、2004 392-393頁)

「なぜ工場内部の技術者や専門家達が動かなかったのか。事実を公表しなかったのか。」という原田の問いによく答えていると思われるのは、

(アイヒマンは)自分の昇進にはおそろしく熱心だったということのほかには彼には何らの動機もなかったのだ。そうしてこの熱心さはそれ自体としては決して犯罪的なものではなかった。勿論彼は自分がその後釜になるために上役を暗殺すること

* 立命館大学産業社会学部准教授

などは決してしなかったろう。俗な表現をするなら、彼は自分のしていることがどういうことか全然わかっていなかった。…彼は愚かではなかった。完全な無思考—これは愚かさとして同じではない—、それが彼があ時代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ。…現実離反と無思考は、人間のうちにある恐らくは潜んでいる悪の本能のすべてを挙げてかかったよりも猛威を逞しくすることがあるということ。（アレント（大久保和郎訳 1969版）221-222頁）

というアレントの言葉である。

アレントは組織の中にいる人間の「無思考」こそが、悲劇の本質であると指摘する。アレントが指摘するアイヒマンの「無思考」すなわち「自分のしていることが全然わかっていないこと」は、全体主義とレイシズムが渾然一体となったナチスという組織を背景とするが、水俣病の拡大においても、「会社共同体」に対する会社人間的「無思考」が「猛威を逞しく」したのではないか。

以下、2つの言葉をつなぐ授業設計をすすめる。

1. 授業設計

(1)教材開発のフレーム

企業不祥事に対して、「企業が事業活動を遂行する上で法令・企業倫理を遵守・実践していく活動」（後藤啓治，2006）である「企業コンプライアンス」や危機管理をマニュアル化する「リスクマネジメント」という言葉がよく聞かれるようになった。企業コンプライアンスにせよ、リスクマネジメントにせよ当然の前提とされていることであるが、実行に移すことは難し

い。なぜならそれらを実行に移すには、それらが大切であると共通理解できるような組織の文化・慣習・集団的思考パターンが必要とされるからである。各組織独自の文化・慣習・集団的思考パターンなどを決定するファクターとして岡本浩一・堀洋元・鎌田晶子・下村英雄（2006）は組織風土という概念を次のように提唱する。

「組織に所属するメンバーが自分の組織をどのように認識しているか」を記述したものを組織風土という。組織風土は、所属メンバーの行動や価値観、組織の慣行などに影響を与える。同様の事態が生じて、組織によってその行動様式がことなるのには組織風土の影響があると考えられるだろう。（岡本・堀・鎌田・下村，2006 74頁）

岡本浩一・鎌田晶子（2006）は、組織風土は組織のDNAであり、企業のグローバル化・再編化・合理化などが進む現代に於いてもなお創業当時の組織風土が残存することを、リコール隠し事件を引き起こした三菱自動車工業を例に述べる。

（三菱自工のリコール隠しに関して—引用者補）

三菱グループのなかでも、三菱重工業、東京三菱銀行、三菱商事の3社は「三菱グループ御三家」と呼ばれ、グループの中核をなしている。三菱自工をはじめとする他のグループ内企業の役員構成を見ると、三菱重工業から役員として人材が送り込まれることはあるが、その逆は原則としてない。歴然とした力関係が形成されているのである。三菱という組織には、創業当時、つまり明治時代の役所の風土が現在まで色濃く残っている。

（岡本・鎌田，2006 81頁）

水俣病の拡大の原因を考えると、チッソおよびチッソ水俣工場の組織風土からのアプローチが有効であろう。チッソはいかなる組織風土を持った企業であったのか、以下考察をすすめる。

（2）教材開発の視点から見た具体的諸事実^{3）}

①チッソ水俣工場の組織風土

チッソ水俣工場にはどのような組織風土が見られたであろうか。かつての労働者の証言から戦前の水俣工場の様子から伺われる。

戦前の水俣工場の職制は、工場長の下に課長と主任が居て、その下が各係の係長だった。係長の下が係員、それから下は組長、副組長、責任者、職工です。身分でいえば、組長以下が傭員、係員以上が職員で、準社員と社員に分かれていた。…職工の採用、罷免の人事権は、工場の人事係でなしに、各係の係長が持っていた。昇給の査定はもちろんだ。それで、「生殺与奪の権」でいいよった。昔の係長ていや、天皇陛下、殿さんやった。係長が係員を四、五人お供に連れて社員食に飯食いに行くときなんか、まこーて殿さんみたいだった。（岡本達明・松崎次夫編、1990 226頁）

戦前のチッソ水俣工場は前近代的な階層意識の強力な磁場であったことが伺える。1945年の敗戦によって、朝鮮半島から朝鮮興南工場幹部・技術者が水俣工場に引き揚げてきた。もとの水俣工場の従業員達は、彼ら引き揚げ者を「進駐軍」と呼んだ。「進駐軍」とは、「天皇陛下」「殿さん」に変わる新たな支配者という意味であろう。戦後チッソ水俣工場が発行した水俣工場新聞において、水俣市民が「工場はお城でそこに通う社員は武士階級」と例えた表現

からも伺えるように、チッソ水俣工場は戦前以来の階層意識が受け継がれ、水俣市民に水俣はチッソの企業城下町であるという意識を残存させた。^{4,5)}

以上のことから、三菱自動車工業がリコール隠し事件当時、創業当時以来の明治時代の役所の風土を受け継いでいたとするならば、チッソ水俣工場も前近代的な階層意識が受け継がれてきたと思われる。

前近代的な階層意識は、どのような組織風土をもたらすであろうか。

田原嗣郎（1988）によれば、前近代的な階層意識の基底にあって、人々の言動に大きな影響を与えたのは日本特有の公私観念である。日本の伝統的な公私観念の特徴は、まずなによりも「公（おおやけ）」を「私（わたくし）」の上位に置くことである。そして、「公」は、首長の権威そのものを「公」とする「首長性」と共同体の成員間合意による「共同性」からなる二重構造である。「公」の二重構造において、「共同性」は「首長性」に対してはより「私」に近いものの考えられ、政策決定などの「公」の意思決定の場で、「首長性」と「共同性」がぶつかった場合葛藤や二律背反には至らず、まずは「首長性」を尊重するという、意思決定パターンをとった。すなわち、共同体の合意の上での決定や、共同体の個々の成員の利害にかなった事柄であっても、権力者である「お上（おかみ）」の意志と方向が違えば、それは「私利私欲」と軽視され、「お上」の意志に無条件に従う「滅私奉公」が要求される。「ご無理ごもっとも」「長いものには巻かれろ」という言葉には、首長性が押しつけた「公」と共同体の合意や個人の意思との葛藤があらわれている。

岡本・堀・鎌田・下村（2006）によれば、「お

上」「減私奉公」「ご無理ごもっとも」「長いものには巻かれろ」といったような意識は、現代における企業組織と無縁ではない。

組織風土は、組織における意志決定に影響を及ぼす。意志決定にかかわる情報処理には、「その決定が組織にとってよい決定なのかどうか」という「事柄」の部分と、「それは誰から上がってきた案件に基づいた決定なのか」という「人的要素」の部分がある。基本的に、物事を判断する際には「事柄」と「人的要素」の両方を勘案するものだが、人的要素を重視する傾向が不自然に高い考え方を「属人思考」と呼んでいる。つまり、属人思考では、意見内容の妥当性よりも意見の出処（人）が重要なのである。（岡本・堀・鎌田・下村，2006 74-75頁）

属人思考が根深く浸透し、重要案件から日常の些細な事柄まで、いたるところに影響を及ぼすような風土を「属人的組織風土」（属人風土）と呼ぶ。（岡本・堀・鎌田・下村，2006 76頁）

岡本・鎌田（2006）は「属人思考」「属人風土」の問題点として、以下の2点をあげる。

風土が属人的である組織ほど、組織的違反を潜在的に多く抱えている。すなわち、上層部が不適切な同調や服従を下に強い、関連情報の隠蔽を謀り、不適切な箝口令を布こうとするとき、それらの行為は、属人風土のもとで行いやすい（岡本・鎌田，2006 10-11頁）

集团的思考や意志決定において属人思考が強い組織では、対人関係が過度に濃密となり、意見の賛成・反対が対人関係の正負と混同される傾向が生

じ、事柄を事柄として冷静に見ようという姿勢が失われる傾向が生じる。（岡本浩一・鎌田晶子，2006 10頁）

田原（1988）の指摘する前近代的な公私観念、岡本・鎌田（2006）による「属人思考」「属人風土」、これこそがチッソ水俣工場の従業員に「無思考」をもたらし、結果として水俣病の拡大に結びついた。以下、具体的な「無思考」のあり方を見ていきたい。

②「働き方」から見たチッソ水俣工場

原田（2004）の、「このとき原因物質の究明に最も近いところにいたのは、工場内部の技術者や専門家たちであった。にもかかわらず、彼らは動かなかった。後に工場内の動物実験で原因が明らかになったときも、その事実を公表しなかった。」という言葉に戻ろう。原田の言葉には、技術者や専門家は、科学的事実に基づいて行動すべきであるという彼自身の行動基準が垣間見える。しかし、実際には工場技術部の技術者たちはそのように行動しなかった。この事実こそが「なぜ水俣病の被害が拡大したのか」という問いに対する一つの解答となる。

以下、工場技術部を巡るエピソードを紹介し、技術者達の「働き方」がいかに「属人的組織風土」に左右され、それが水俣病の被害拡大にどう結びついたか読み解く。

エピソード1

1956年5月1日、チッソ水俣工場付属病院院長細川一が、水俣保健所に「原因不明の中樞神経疾患が多発している」と正式に報告。のちに水俣病公式認定の日と認められる。その後も「奇病」の患者は増え続け、「奇病は伝染する」

といううわさが流れ、「奇病」に関する騒ぎは大きくなってきた。同じ頃、熊本大学の研究グループが「重金属説」を発表した。当時、チッソ水俣工場の工場室長であった太田恒雄は、患者が多発していた地域を見て回り、魚貝類の死滅など異変を確認した。太田はその様子を工場長西田栄一に報告したが、西田は反論。熊本大学研究グループの説に反論するために工場技術部に「奇病」の原因がチッソ水俣工場の排水と関係ないことを解明するよう求めた。公判に於いて水俣病の原因について西田は以下のように証言した。

もしかしたら工場排水が原因かもしれないというのは考えました。アセトアルデヒドについては、私自身が注目しました。（しかし一方で）確かに戦後、アセトアルデヒドの生産は伸びたが、戦前の最盛期と変わらない。いまになって奇病が起きる訳がない。（とも思った）（NHK, 1996）⁶⁾

エピソード2

1959年7月14日熊本大学研究班の報告により、原因物質として有機水銀が注目された。これを受けて工場長西田は、工場技術部に熊本大学説に対する反論を指示、工場技術部は旧軍部が水俣湾に残した残留爆薬が原因であるとする爆薬説を検証するための研究を開始。同時に工場付属病院長の細川も、後にネコ400号実験と名付けられた工場排水をかけた食餌を与える実験を開始。細川は実験を振り返る。

昭和三十四年七月二十一日に実験をはじめて、十七日後の十月六日、ついにナンバー四〇〇は、水俣病様の病状を呈した。…いま考えると、この段階で発表してもよかったのではないかとも思

う。しかし、当時のわたしは、ひたすら正確に、正確にと考えていた。廃水の中には、ナマリ、セレンウム、タリウムなどの重金属もまざっていることはすでにわかっている。脳障害をおこすこれらの重金属は、チッソの廃液の中のみにあるとは限らない。たった一例にすぎないナンバー四〇〇の事例だけで断定するのは危険だと判断（した。）（細川, 1968）⁷⁾

しかし、細川は九州大学病理学教室より発病ネコは水俣病と推定されるとの病理所見を受け取っていた。このネコ400号実験の結果を報告された工場技術部次長の市川は、実験結果を無視する。市川は証言する。

（ネコ400号実験）は実験例が一つしか無くて、この結果が正しいかどうか一例だけではわからないから、自分としてはこの一例を見解書に載せたくはないので、もっと実験を重ねて正しいかどうかわかってから見解書に載せましょと、細川さんに言ったわけです。それでこれを見解書から外したんですがね。会社が都合が悪いから外したという噂が飛びましたね。それは全く違うのであって、私と細川さんの意志でむしろ私の意志だったのかもしれない。外したわけです。（外したことについては）私は正しかったと思いますね。例えば一例でもって判断するというのは非常に危険ですからね。（NHK, 1996）

さらに実験を進めたいと要望する細川に対して、爆薬説の立証がまだなされていないことを理由に市川は実験の中止を命じる。しかし爆薬説は結局立証できなかった。1960年8月ネコ実験再開。実験再開当時の気持ちを市川は回想する。

いざ会社関係の実験をやろうとすればですね、もう手が震えて結果を知るのが恐ろしいくらい。会社でないことを祈りながら実験をする。これはもうやった人間でないといけないと思います。（NHK、1996）

再実験の結果、9匹中7匹（細川の回想によれば8匹）に異変が起こったが、細川も市川も異変が起きたネコの症状を水俣病とは認めなかった。（後の病理解剖では水俣病と断定された）再実験について、市川は証言する。

私は会社の人間ですから、仕事と会社の間に入って非常に悩みましたね。いま考えれば私はその時とにかくほっとしたわけですからね。ほっとした気持ちがうれしくて3回やる気持ちはなかった…。（NHK、1996）

市川の言葉にある「仕事」と「会社」とは何か。おそらく市川は、安全で安価で高品質な製品をつくりあげるといふ技術者本来の業務を「仕事」と表現し、チッソという会社の組織を防衛しなければならないチッソ幹部としての立場を「会社」と表現したのではないか。水俣病研究に於いては、まず組織防衛を優先した「会社人間」であらねばならなかったことについて非常に悩んでいる。

細川の場合は、再実験の結果についてもっと率直に述べている。

昭和三十五年八月、猫による実験が再開され、八例の実験結果はすべてチッソの廃液による水俣病発生を裏づけるものだったと、いまとなつては考えている。少し遅れて、技術部の若手により、廃液の分析もすすめられていた。翌三十六年九月、

非公式に廃液を入手した熊大研究班が、ついに有機水銀をその中から検出することに成功し、その結果が世に公表された。その内容は、わたしたちがすすめてきた研究と同じ結果になった。もし、わたしたちの研究が完全にまとまるまで熊大の発表がなかったなら、わたしは研究結果を公開したのちに、辞職したであろうと思う。それでなければ、良心が許さない。が、もしそうしたら、協力してくれた若いチッソの研究者たちは、大変つらい立場におかれることにもなろう。いちおうの結論が出た以上、もうわれわれが成果を発表する必要はあるまいと判断し、わたしは会社に辞表を提出した。（細川、1968）

細川の言葉は自らの責任問題に関して行きつ戻りつしている。しかしながら研究者としての良心と、若いチッソの研究者たちのつらい立場に仮託した組織防衛との乖離を表している。

細川が回想するように、実験後まもなく細川は退職（定年延長3年）し、市川は水俣工場から異動し、水俣病研究から離れた。

エピソード3

1960年頃には、もはやチッソ水俣工場の工場排水に含まれる有機水銀が、水俣病発病の原因物質であることは社会的に広く支持されていた。そんな最中、工場技術部の若い技術者石原俊一は、声高に叫ばれていた有機水銀説が本当なのかどうか。つまり工場排水に有機水銀が含まれているのかどうか実験を始めた。これは世間でとやかく言われていることが本当なのかどうかとにかく追究したいという研究者としての思いからであった。その結果、石原は廃液の中からの有機水銀抽出に成功する。この結果を、当時の工場技術部次長であった上妻博宜に報告

したが、上妻は石原の報告に冷淡で、直ちに公表すべきではないと考えた。上妻は証言する。

社内を納得させる問題が一つあるんだね。工場排水にメチル水銀が含まれていても、魚の中でどうなるのかまでわからないと答えにならないと。
(NHK, 1996)

一つの事実が検証されると、次にはもっと高度で難解な事実が解明されなければならないという上妻の証言から、当時のチッソ水俣工場は水俣病発生・拡大の原因および責任をどうしても認めないという体質があった。そしてこのことが、チッソ本社および国の後押しを受けていたことは、前述の原田の「患者の状態は、目を覆いたくなるようであった。しかし、チッソも行政も「原因不明」を理由になんら有効な対策を立てなかった。実際、不明だったのは原因物質であって、原因が魚貝類であることは、すぐに明らかになっていたのである。…これはたとえば、仕出弁当が原因で食中毒がおり、重大な危険があるのに、弁当の中の何が原因か分からないからと言って売り続けるようなものであった。」という言葉から伺える。水俣病研究とは技術者達にとって「ない方がいい」仕事であり、自らの創意工夫が生かせるような「前向きな仕事」でないことを物語っている。上妻は証言する。

要するに会社というのは、ものをつくり開発してものをつくり…それが前向きな仕事なんです。
(有機水銀説に反論するといった)「こうでない」ということばかりをやっているのは、前向きじゃ無いわけですよ。言うなればない方がいいわけです。そういう問題がなかった方がよかったわけ

です。(NHK, 1996)

この直後、1962年チッソ水俣工場に全従業員を巻き込んだチッソ労働争議が起こった。工場の操業は困難となり、技術部の水俣病研究は終わった。その後1963年2月20日に熊本大学研究班が、工場排水と貝からメチル水銀の抽出に成功したという発表後もなお、チッソ水俣工場の工場排水は止まらなかった。1965年に新潟県での第二水俣病の発生が確認された後、1968年になってようやくアセトアルデヒド製造設備が稼働停止し、有機水銀の流出が止まった。しかしながらこれは、化学製品の原料石油化が進んだ結果、アセトアルデヒド製造が必要なくなったからである。

エピソード4

チッソ水俣工場工場長西田は1960年、チッソ水俣工場を離れた。NHK スペシャル (1996) によると有罪判決後、チッソと縁を切り、全責任は自分にあると責めを負い続けた。チッソに「迷惑をかけたくない」「会社の失敗は自分の失敗」という思いがあったと考えられる。遺志に従い妻子以外には誰にも死は知らされず、戒名もつけられなかった。家族への遺言は「罪人となった自分を許してほしい」であった。

西田は確信犯的に水俣病を拡大させた。しかしそれはチッソという企業のリーダーの立場からすれば、「義」に基づく行動であった。

会社員にとっては会社は「公」であり、会社の利害は全てに優先するが、国家を「公」とする立場からみれば会社のそれは「私」である。この場合、会社の利益のために国の法律に違反したとして、それが国の裁判で有罪とされても、会社を

「公」とする立場からはその行為は「義」とされる
といったことである。（田原，1988）

エピソード1～4から考えると、技術者・専門家達は科学的な見方・考え方を要求される技術者本来の仕事がしなかったのであるが、チッソ水俣工場の「属人的組織風土」に縛られ、会社の利益を何よりも優先する工場長西田の意向のもと、工場排水原因説の否定の検証という会社の方針に忠実な仕事に従事せざるを得なかったと言えよう。しかしどちらにせよ「チッソ共同体」を越えた視覚・視野は見あたらない。「仕事」と「会社」の矛盾という市川の悩みも、「前向きな仕事」と「水俣病研究」との矛盾という上妻の悩みもチッソの社員・会社人間としての悩みであり、組織での「働き方」における人格の分裂が悩みなのである。

鎌田（2003）は以下のように述べる。

（倫理的な問題において個人人格との）葛藤を回避し、組織人格を受け入れた、いわゆる会社人間になると、組織の価値観が、メンバー個人の潜在的な価値観を浸食してしまう。個人が組織人格化してしまうと、組織の道德準則にのみ従う個人を生み出し、たとえ倫理性のない決定であったとしても当然のように無意識的に受け入れてしまう危険性をはらんでいる。（鎌田晶子，2003 192頁）

「道德準則」とは、共同体に閉じられた道德であり、チッソ水俣工場においては、「会社の組織を防衛するためには、すべての意思決定レベルに於いて、水俣病発生拡大と工場が関係ない方向に意思決定すること」であった。そしてその「道德準則」は、国政レベルに於いても承認されたものであった。

当時、政府は、「もはや戦後ではない」（1955年）から「国民所得倍增計画」（1960）の時期を迎えて、「国家や会社などのシステム全体の生産力を増大すれば、人は豊かになり、幸福になるという」⁸⁾「生産力ナショナリズム」に基づいた政策を推し進めていた。

水俣病の原因の調査のためにつくられた水俣病総合調査研究連絡協議会において、事務局を担当した経済企画庁水質調査課課長補佐であった汲田卓蔵は以下のように証言する。

われわれの課内では（水俣工場の工場排水を）止められないんじゃないか、止めないで最善の方法という議論がありました。あの当時、人が亡くなったからすぐに止めろといわれても、僕らは止められなかったな。命はそんな工場の一つや二つでなくということもわかるけどね。僕は止められなかったね。はっきりいって。やっぱり高度成長期の真最中で、追いつけ追い越せの時代だったわけですね、だから産業性善説ですよ。時代がそういう時代だったんだよ。時代に負けて、それを担当する役人が何もしなかったんじゃないかと言われるれば、謝るしかない。ある程度わかってて、やってんだから、何といひかな、確信犯。僕は確信犯だと思うね。（NHK，1996）

汲田は「ある程度わかってて、やっている」「確信犯」と言うが、水俣病の拡大が引き起こした悲劇を考えるにつれ、彼の行為はアレントのいう「彼は自分のしていることがどういふことか全然わかっていなかった。」行為であろう。汲田の言葉に代表される政府の姿勢は、チッソの利潤追求型の方針に「お墨付き」を与えた。

2. 具体的な授業計画

以上の考察を元に、具体的な社会科授業を設計する。詳細については、資料2を参照されたい。

3. 公民的資質への道筋

公民的資質とは社会科の教科目標である。公民的資質とは、「すでにある現実社会」にうまく適合できる資質ではなく、「よりよい社会」をつくりあげるために必要とされる個々人の資質である。児童・生徒を「よりよい社会」をつくりあげる主体となすための授業を設計するためには、公民的資質の公の内実が何であるのかについての議論を欠かすことが出来ない。

「よりよく働く」ことは「よりよい社会」をつくりあげる前提の一つである。すなわち、「よりよく働く」ことは、公民的資質に於いて中核的な位置を占めるだろう。児童・生徒たちの多くは、将来、組織の中で働かなければならない。その現実を前提として、児童・生徒が組織の中で「属人的組織風土」や閉じられた組織の道德準則に縛られることなく「よりよく働く」ことを目指すために、社会科は何を前提としなければならないのだろうか。社会形成の立場からなされている公共性をめぐる議論が示唆的である。

齋藤純一（2000）は、共同体と公共性の違いを論じることによって、共同体から公共性への大まかな筋道を示す。

公共性と共同体にはどのような違いがあるのだろうか。まず指摘できるのは、共同体が閉じた領域

をつくるのに対して、公共性は誰もがアクセスしうる空間であるという点である。…第二に、公共性は、共同体のように等質な価値に充たされた空間ではない。…公共性の条件は、人びとのいづく価値が互いに異質なものであるということである。公共性は、複数の価値や意見の〈間〉に生成する空間であり、逆にそうした〈間〉が失われるところに公共性は成立しない。第三に、共同体では、その成員が内面にいづく情念（愛国心・同胞愛・愛社精神等々）が統合のメディアになるとすれば、公共性においては、それは、人びとの間にある事柄、人びとの間に生起する出来事への関心（interest）…である。公共性のコミュニケーションはそうした共通の関心事をめぐっておこなわれる。…最後に、アイデンティティ（同一性）の空間でない公共性は、共同体のように一元的・排他的な帰属（belonging）を求めない。…この空間におけるアイデンティティは多義的であり、自己のアイデンティティがただ一つのアイデンティティによって構成され、定義されることはない。（齋藤，2000 5-6頁）

閉じられた共同体的思考から公共性への道筋はどのように描けばよいであろうか。

杉浦敏子（2002）は無思考性の本質と、そこから抜け出すには「公開」が大切であることを、アレントの思想をもとに述べる。

「無思考性」とは「決まり文句、常套句、習律的で標準化された表現や振る舞いのコード（アレント『精神の生活』杉浦引用）」に固執することを意味する。逆に「思考を働かせる」ためには、思考の対話を行い、一方の自己に対し、何かをするなど働きかける自己が必要であり、彼女（＝アレント）はそれを良心（conscience）と呼ぶのである。

※ con（強調をあらわす接頭語）＋ science（科学）…すべての人への公開に耐えうる行動を自らに課すことこそ、私的利害に基づく行動を公的行動へと転化することなのである。あらゆる他者にとって妥当なものだけが、公平で正義にかなうものとなる。公開されることで特殊利益は払拭され（他者の存在があつてはじめて自己利害を放棄できる）判断は私的から公的に転換する。（杉浦、2002 202頁）

齋藤（2000）は、杉浦（2002）と同じくアレントの思想をもとに「パースペクティブの多様性」の重要性を述べる。

意見＝判断をより妥当なものにするのは、自らとは異なったパースペクティブが他者によっていだかれているという事実をわきまえ、他者のパースペクティブを考慮に入れる…ことである。この他者の立場にあつたら事柄はこのように違ってみえるかもしれないという仮設的な思考における幅が、私たちの判断にそれだけの妥当性を与える。（齋藤、2000 51頁、強調は原文のまま）

アレントは言う。

（公共性は）無数の遠近法と側面が同時に存在する場合に確証される。（アレント（志水速雄訳 1994版）、85頁）

共通世界の終わりは、それがただ一つの側面のもので見られ、たった一つの遠近法において現れるとき、やってくるのである。（アレント（志水速雄訳 1994版）、87頁）⁹⁾

技術者たちの証言を吟味することにより、技

術者たちには「会社上層部からの承認」というただ一つの「遠近法」と、「会社組織防衛のため」というただ一つの「側面」にもとづく組織人格しか伺えないことがわかる。そしてそれがもたらした悲劇を知ることによって、無数（少なくとも複数）の遠近法と側面への欲求が現れる。授業においては、現在の自分たちの立場、当時の一般国民の立場、工場技術者の立場、初期水俣病患者¹⁰⁾の立場などさまざまな立場に立たせて考えさせることが可能である。その学びの積み重ねが公民的資質へと繋がる。

おわりに

大企業や官公庁などの組織およびその中の個人による犯罪的行為が後を絶たない。また、組織における過剰適応的な働き方が過労死などの労災をもたらしている。

その一方で、学校現場では、職業観・勤労観を児童・生徒たちに涵養するというキャリア教育が喧しい。ここでは触れないが、その内実は組織における過剰適応に繋がる虞がある実践も、「よい実践」として取り上げられている。

現在のような状況の中では、「働き方」を相対化する学びが必要とされている。「働き方」を相対化する学びへのアプローチは様々であると考えるが、社会問題学習という社会科の学びはもっとも効果的なものの一つであろう。

注

- 1) 1970年代から盛んに実践された公害に関する授業についても、公害発生の原因となった企業の組織について十分に追求することなく、企業組織を擬人化した上で単純に悪者に仕立て上げ、一方的に断罪するという、勧善懲悪・思考判断停止の実践が主流であった。例えば、熊本

市立竜南中学校教諭の田中裕一が1968年に実践した「日本の公害－水俣病」（川合章編『産業と公害の学習』1972 明治図書所収）は、水俣病に関する実践の早い時期のものであるが、企業の利潤追求の姿勢と、患者の「人間性」を対立的に捉えさせ、患者への心情理解を目的とする授業である。このような授業がその後も典型となった。最近の例を挙げれば、藤瀬泰司（2004）は企業の組織のあり方に対して、社会問題学習のアプローチを取る数少ない事例である。藤瀬は日亜化学工業を「利潤を追求する官僚型会社組織」と分析しているが、「官僚型」とはどのような組織なのかについての分析が充分になされていない。他に企業そのものを授業化した実践として大野新（2010）があるが、これはトヨタの組織の問題点（主として労働問題）に触れつつも、ものづくりに焦点を当てた実践である。

- 2) 会社名については時代を問わずチッソと表記する。会社名の変遷については、本稿資料1「水俣病とチッソ技術部関連年表」参照。
- 3) 以下、歴史的事実については、資料1「水俣病とチッソ技術部関連年表」参照。
- 4) 石牟礼道子（2004）によれば、水俣病が公然となった1961年の水俣市とチッソとの関係は以下の通りである。

…税収入二億一千六拾万中、…日窒関係だけで約一億一千五百六拾万とあるのをみれば、昭和二十四年に市制発足した水俣市の経済的基盤が日窒とともにあることもまた事実である。その他、産業別人口のうち製造業四千四百六拾人中、日窒従業員三千七百、余の製造業従事人口はその約80%が、日窒下請工場か関連産業の従業員数であり、水俣市の人口は五万弱である。（石牟礼、2004 118-119頁）

- 5) 階層意識の中で上位に位置しているという意識を持つチッソ従業員たちは、水俣の町で（城の外で）水俣病の被害拡大に対する社会の避難や患者・被害者達の抗議の声が大きくなって、工場側の責任に無頓着であった。1959年11月2日の漁民暴動の際に行われた従業員組合大

会の様子を石牟礼（2004）は次のように描写する。

（1959年）十一月四日夜、水俣市公会堂において新日窒従業員大会が持たれた。発起人、鬼塚義定、五島春夫、村越典夫名でビラがまかれた。

“われわれは暴力を否定する！！工場を暴力から守ろう”

という趣旨で、市公会堂をぎっしり埋めた従業員たちはむしろ被害者は自分たちではないかという不安を著明にした。（石牟礼、2004 134-135頁）

- 6) 以下、工場技術部の元技術者たちの証言については、NHK『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』1996放送（NHK スペシャル）による。筆者がVTRから聞き取り、まとめた。
- 7) 細川一（1968）については、当該資料（『文藝春秋』1968年12月号）を参照することが出来ず、再録の資料によったので、頁数を記さない。
- 8) 栗原編（2000）
- 9) 志水速雄の訳による。「遠近法」とはパースペクティブの訳であり、「視角」とも訳せる。「側面」とはアスペクトの訳であり、「視野」とも訳せる。
- 10) 水俣において階層の底辺に位置すると見なされていたのは、チッソ関係以外の引き揚げ者であった。彼らから初期水俣病患者の多くが出たが、患者は隔離され周辺住民から孤立した。チッソ水俣工場付属病院長である細川一は奇病とよばれた水俣病が多発し始めた頃、よく患者を往診したが、患者の家の様子を以下のように回想する。

患者の多発地帯は、月ノ浦、湯堂と呼ばれる海岸ぞいの部落で、おおむね引き揚げ者の家族であった。田畑もなにもなく、掘立て小屋のような家に住み、原始的な方法で魚介類をとって生活していたが、売れそうなサカナは町へ売りにいき、残ったサカナを主食がわり

に大量に食べて腹を満たすのである。…足を
ふみ入れただけでぞっとするような貧しさ
（細川、1968）

文献等

NHK『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』1996
放送（NHK スペシャル VTR）
ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま文庫版
（1994、志水速雄訳）
『イェルサレムのアイヒマン』みすず書房版（1969、
大久保和郎訳）
石牟礼道子『新版苦海浄土』2004 講談社文庫
大野新「トヨタをどう教えるか」『歴史地理教育
No.755』2010 歴史教育者協議会
岡本浩一・鎌田晶子『属人思考の心理学』2006 新
曜社
岡本浩一・堀洋元・鎌田晶子・下村英雄『職業的使
命感のマネジメント』2006 新曜社
岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史4』1990
草風館
鎌田晶子「決定をゆがめる組織・ゆがめない組織」
岡本浩一・今野裕之編『リスクマネジメントの

心理学』2003 新曜社
川合章編『産業と公害の学習』1972 明治図書
栗原彬編『証言 水俣病』2000 岩波書店
後藤啓治『企業コンプライアンス』2006 文藝春秋
齋藤純一『公共性』2000 岩波書店
杉浦敏子『ハンナ・アレント入門』2002 藤原書
店
田原嗣郎「日本の「公・私」（上）・（下）『文学』
VOL.56 1988 岩波書店
原田正純『水俣病』1972 岩波書店
「水俣病の五十年」2004 講談社（石牟礼道子『新版
苦海浄土』講談社文庫解説）
藤瀬泰司「社会形成の論理に基づく社会科経済学習
の授業開発—単元「君は会社でどう働くか〜特
許権問題から見える会社のあり方〜」—」『社会
科研究 第61号』2004 全国社会科教育学会
細川一「今だから言える水俣病の真実」『文藝春秋』
1968年12月号（『ドキュメント日本人7』1969
学芸書林所収）
水俣病研究会編『水俣病事件資料集』上巻・下巻
1996 葦書房

資料1 水俣病とチッソ技術部関連年表 ※1

年	日本 (世界)	水俣周辺	チッソ・水俣工場	西田英一 (工場長)	太田恒雄 (工場室長)	塩田忠次 (技術者)	細川一 (附属病院院長)	市川正 (技術部次長)	石原俊一 (技術者)	上妻博宣 (技術部次長)
1909			日露水俣肥料工場完成							
1928			朝霞南工場の建設開始							
1941	真珠湾攻撃		塩化ビニール製造開始							
1945	敗戦		興南工場失う (資産の 80%) 引き揚げ社員水俣工場へ 疎唐川内容ダム開発計画	引き揚げ		実験で有機水銀発生 装置改良提言				
1950	サンフランシスコ講和会議 (朝鮮戦争〜53)									
1951										
1952	IMF、世銀加盟									
1953			内容ダム計画挫折 アセトアルデヒド増産							
1955	神武景気 (〜57) 55年体制									
1956	「もはや戦後ではない」									
1957		奇病は伝染するという噂 重金論説 (熊本大学)	水俣病発生公式認定 (5.1)							
1958		魚介類の毒性確認 (保健所) 水俣病患者家庭互助会結成	技術部の研究 (→熊大説) ↓ 工場排水口の変更	反論 ↓ 熊大説の再確認						
1959		患者発生地域の拡大 ↓ 有機水銀説 (熊大)								
1960	水俣食中毒部会報告 (11.12) ※3 国民所得増進計画 日米新安保条約	漁民、水俣工場に乱入 (11.2)	ネコ 400 号発症 (10.6) 排水処理設備完成 (疎込) 見舞金契約締結 (12.30) ※4	県議会証言 ↓ 人事異動水俣去る						
1961										
1962										
1963										
1965	第二水俣病の発生		チッソ労働争議 技術部の水俣病研究の終了							
1968	水俣病、公害病認定 (9.26)	有機水銀説立証 (熊本大学)	水俣工場水銀流出停止 (5.18)							
1973		熊本地裁判決、チッソ敗訴								

【NHK『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』1996 放送 (NHK スペシャル) 等より作成】

エピソード①
エピソード②
エピソード③
エピソード④

※1 : 1908 年日本窒素肥料 (株) 設立。1950 年新日本窒素肥料 (株) にそれぞれ社名変更。
 ※2 : 水俣工場技術者の塩田忠次は、1950 年のアセトアルデヒド生産の実験の際、有機水銀の発生を確認。大きな装置の改良が必要と指摘したが、工場上層部は耳を貸さなかった。
 ※3 : 食品衛生調査会、水俣食中毒部会の結論により「水俣病の原因は湾周辺の魚貝類の有機水銀」と厚生大臣に答申。同部会は即日解散させられる。
 ※4 : 「今後原因が工場排水とわかっていても追加補償しない」という条項が、後の判決で「公序良俗に反する」と指摘された。

資料2

授業名：チッソ水俣工場はなぜ工場排水を止めなかったのか

＊実践の想定：中学校社会科歴史的分野または小学校6年生歴史学習

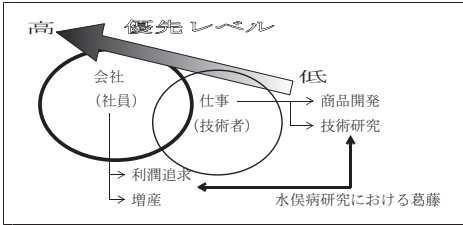
＊小単元：「高度経済成長期の日本」

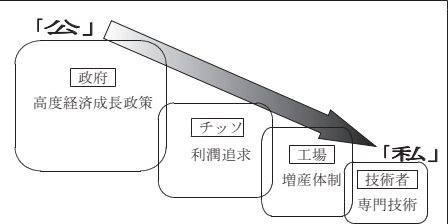
＊ねらい：栗林彬是水俣病の発生の原因を「近代世界を席巻した生産力ナショナリズムの政治抜きには考えられない。」と述べた上で、「生産力ナショナリズムとは、国家や会社などのシステム全体の生産力を増大すれば、人は豊かになり、幸福になるというイデオロギーであり、政策でもある。」と述べるが、この「生産力ナショナリズム」を支えたのが、「誠私奉公」の言葉に端的に現れる伝統的な日本の公私観念である。

以上のことを受けて本授業に於いては次の2点をねらいとしたい。

①高度経済成長を支えた「生産力ナショナリズム」の概念を習得させた上で、水俣病の発生・拡大は「生産力ナショナリズム」の結果であり、「生産力ナショナリズム」を支えたのは伝統的な日本の公私観念であることを理解させる。

②いまなお続く組織の事故・不祥事をなくするためには、組織が「公共性」に開かれた組織であることが必要であることを理解させる。

	学習内容	指導者の活動（○発問・●説明）	生徒に獲得させたい知識・予想される活動	資料
導入	水俣病の概要 （小・中共通の展開）	○水俣病とは何か。 ○水俣病はなぜ起こったのか。 ○なぜ被害が広がったのか。 ○チッソ水俣工場は工場排水を止めたのか。	・今から50年前に熊本県水俣市で確認された。 ・四大公害病の一つ。 ・麻痺、言語障害、歩行障害など様々な症状が確認されている。劇症の場合は痙攣、狂躁状態、意識不明を経て死ぬ ・チッソ水俣工場から排出される廃液に含まれる有機水銀が原因。有機水銀を含む魚貝類を食べた水俣の住民が、有機水銀により中枢神経を侵され発症。 ・排水口を水俣川河口付近に変えたため、被害は不知火海沿岸南側全域に広がった。 ・約10年間そのままにした。	① ② ③
高度経済成長 （小・中共通）	高度経済成長 （小・中共通）	○水俣病が発生・拡大した時期は。 ○そのころの日本はどんな時代か。 ○高度経済成長期の産業の変化は。 ○高度経済成長期の社会の変化は。 ●栗原彬の「国家や会社などのシステム全体の生産力を増大すれば、人は豊かになり、幸福になる」という考え（生産力ナショナリズム）を使って、高度経済成長政策の目的や政府・企業・国民の関係を説明。	・1956～58年頃 ・高度経済成長期（「もはや戦後ではない」・国民所得倍増計画） ・製造業の技術革新・輸出の拡大・第二次、三次産業の地位向上 ・消費革命・レジャーの発達・衣食住の洋風化	① ② ④
水俣病の発生と原因 （小・中共通）	水俣病の発生と原因 （小・中共通）	○原田純一氏はチッソ水俣工場の技術者や専門家が、工場排水が原因という事実を知りながらその事実を公表せず、被害が拡大したことを指摘する。技術者や専門家がなぜそのような行動を取ったのか。（中心課題の提示） ○政府にとってチッソはどんな存在か。 ○チッソにとって水俣病の発生・拡大はどのような問題であったか。 ○政府にとって水俣病の発生・拡大はどのように捉えられたか。 ○チッソ水俣工場にとって水俣病の発生・拡大はどのような問題であったか。 ○チッソ水俣工場の技術者は水俣病の発生・拡大の時にどのような作業に関わったか。 ○そのことを技術者はどう思っていたか。 ○市川正は「仕事」と「会社」の間に入って悩んだと証言するが、彼らにとって「仕事」とは何か。「会社」とは何か。 ○チッソ水俣工場の技術者達が悩んだのはなぜか。 ●（右図で用いて） 技術者達は自らの技術を商品開発に使い、会社の利潤をあげることが本来の仕事と想っていたが、会社から命じられた水俣病の研究は、「水俣病が工場排水で流れ出た有機水銀によるものではないことをとにかく検証せよ」という会社の利潤追求のみを目的とするものであった。 ○技術者達が水俣病の原因を突き止めても発表しなかったのはなぜか。	・伸びていく化学工業の大企業だから、政府としても重要な企業。 ・利潤追求という企業の目的を達成するためには大きな障害となる問題。できれば取り合わないでいきたい。 ・チッソという高度経済成長を支える会社に責任があるとされ、そのために経営が苦しくなるならば、高度経済成長が滞る。 ・工場の主力製品の製造過程で生成される有機水銀が原因であるならば、工場の存廃に関わる大問題。 ・水俣病の原因究明 ・自分たちの本来の仕事（前向きな仕事）ではない。 ・技術者として、自らの技術を活かしていい製品をつくること。 ・自らがそこに属し、そこで自らの技術を提供し、そのことによって報酬を与えてくれる組織。 	① ② ⑤ ⑥

(以下、中のみ)	○なぜ人命よりも会社の方針を優先したのか。政府・チッソ・チッソ水俣工場・技術者の4つの立場の関係から考えてみよう。 ●(右図を用いて) 政府レベルでの高度経済成長政策に比べると、チッソの利潤追求はより私的なレベルとなる。チッソの利潤追求に比べると、工場の増産体制はよりローカルなレベルとなる。工場の増産体制に比べると技術者の技術の提供は、より個人的・私的なレベルの営為である。従って、技術者がどのような形で技術を提供するかは、政府→会社→工場という段階を経て決定されるものであり、技術者の個人的な願いは聞き入れられない。もし技術者が自らの実験の結果、政府→会社→工場の不利な結果が出ても、このようなしくみの中では公表できるはずもない。このような、個人や小さな集団がより大きな集団のために奉仕しなければいけないという考え方を「滅私奉公」という。「滅私奉公」は第二次世界大戦中の戦時体制の時にもっとも顕著であったが、江戸時代に完成した日本社会の伝統的な考え方である。 政府 「生産力を増大すれば、人は豊かになり、幸福になる」という高度経済成長政策を推進していた。 チッソ 化学製品製造により利潤を追求し、高度経済成長を支える。 チッソ水俣工場 増産体制を拡大することにより会社を支える。 技術部 自らの技術を工場に提供することにより工場・会社を支える。 
公共性への道筋 (以下、中のみ)	○技術者たちに欠けていたものは何か。 ○水俣病の悲劇は再び起きると思うか。 ○人はそれぞれさまざまな組織に属しているが、組織による事故を防ぐために、個人として考えなければならないことは何か。 ○組織としてしなければ、ならないことは何ですか。 ●実際にそのようなしくみを持った企業が存在する。 ・会社に関係ない人の健康や生命を考えること。 ・工場排水がいかに関環境を破壊したか現実を直視すること。 ・自らの職業に対する本当の意味での誇り。 ・起きる可能性はある。 ・起きる可能性はない。 ・組織以外の様々な人々の立場に立って考えてみる。 ※パースペクティブ（公共的視点）の拡大 ・組織の利益以外の価値に目を向けること。 ※公共的課題（環境・人権・安全）への意識 ・自らの仕事に本当の意味での誇りを持つ。 ※公共的精神としての職業倫理 ・上の3点がきちんと守られているか評価する機会を持つこと。 ・組織が行っていることが、 ①利益を上げて「経済的責任」を果たしているか（企業の場合）、②各種法令を遵守して「法的責任」を果たしているか、③「公共性」に基づいており「倫理的責任」を果たしているか、④社会から望まれている「社会貢献的責任」を果たしているか、について日常的に点検する機会を持つこと。 ・テルモ倫理コード
まとめ (小・中共通)	●企業による事故が続いている。企業以外にも組織が関係した不祥事や事故が起きている。個人はなんらかの組織に属しないと経済的にも社会的にも生きていけない。しかし組織に於いて何か判断するとき、組織の決定や方針ばかりに従うようならば、水俣病の悲劇が再び繰り返されるおそれがある。「滅私奉公」とは戦時中に叫ばれたことばだが、「長いものには巻かれろ（その方が楽）」という感じ方は、現在でも私たちの考え方・判断の仕方に影響を及ぼしている。組織以外の人たちの立場に立つてものをみる習慣を付けよう。そして個人のレベルでおかしいと思ったことを大切にしよう。

【資料】

- ①水俣病とチッソ技術部関連年表（NHK スペシャル『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』、栗原彬編『証言 水俣病』、水俣病研究会編『水俣病事件資料集』上巻・下巻 1996 葦書房等より中西作成）
- ②中学校社会科歴史的分野教科書（各社）、資料集（各社）
- ③石牟礼道子『新装版苦海浄土』2004 講談社 pp.34-43「細川一博士報告書」
- ④栗原彬編『証言水俣病』2000 岩波書店 pp.11-13
- ⑤原田純一「水俣病の50年」石牟礼道子『新装版苦海浄土』解説
- ⑥NHK スペシャル『チッソ・水俣 工場技術者たちの告白』1996（ビデオ）
- ⑦梅津光弘「ビジネス倫理学と公共性」山脇直司金泰昌編『組織・経営から考える公共性』2006 東京大学出版会 p.140 表「企業社会責任」
- ⑧テルモ倫理コード http://www.terumo.co.jp/company/csr/compliance_c.html

Note

Social Studies Classes Considering the “Way of Working”

NAKANISHI Hitoshi *

Abstract: It has been widely accepted that incidents and accidents caused by companies are not accidental and that the outbreak of such incidents or accidents are closely associated with the way business organizations are managed and the way excessively well-adjusted employees work. Social studies is a subject that helps students enhance their awareness of society and social issues, and it is necessary to develop educational materials that facilitate students' structural understanding of issues facing modern society. Given the current situation where various corporate scandals have come to light, it is necessary to conduct social studies classes that discuss incidents or accidents caused by companies, focusing on such companies' organizational climate and other aspects, as well as the way individual employees work. However, few social studies classes have been designed in this way, and few educational materials have been developed for such purposes. To explore these issues, this paper takes Minamata disease as one example of the tragic incidents caused by companies, and proposes the design of a social studies class that encourages students' understanding of what caused the spread of the disease, by focusing on the organizational climate of Chisso Corporation, which was responsible for the disease, and the way its employees had been working in those days.

Keywords: social studies, learning about social issues, career education, organizational climate, way of working, Minamata disease

*Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University